社会教育施設ボランティアの自己形成に関する経時的研究

松橋　義樹
（女子美術大学（非常勤））
大木　真徳
（東京大学大学院生）
本庄　陽子
（東京大学大学院生）

【要旨】
社会教育施設がボランティアを受け入れる場合、施設の運営・事業への参画だけでなく、ボランティアの自己形成への支援という側面も重視される必要がある。本稿では、社会教育施設ボランティアに対する経時的なヒアリング調査、及びボランティア担当職員に対するヒアリング調査の結果を「ボランティア活動を通した中年期以降の主婦の自己形成」「ボランティアの自己形成における職員の役割」という2点から分析した。
今後は、本稿で取り上げたヒアリング調査を継続していくとともに、定量的分析が可能となるようなデータの収集方法も検討するなど、多面的な分析を試みる必要があると考えられる。

1. 研究の概要

(1) 研究の目的

今日、ボランティア活動はさまざまな場面でさまざまな形で展開されている。その中で社会教育の視点からは、1970年代に文部省が「婦人奉仕活動推進方策研究委嘱事業」を実施して以降、今日まで社会教育行政施策の一環としてボランティア活動支援施策が展開されてきており、それらと関連を持つもの・持たないものを含めて社会教育の展開とボランティア活動の展開には結びつきが見られる。その中で、社会教育の特色としての自主性・自発性とのかかわりで「ボランティア活動がもつ教育的効果への着目」の必要性がすでに1970年代後半に指摘されている[1]。

1980年代に入ると、臨時教育審議会の4次にわたる答申や1986年の社会教育審議会社会教育施設分科会報告「社会教育施設におけるボランティア活動の促進について」の中で生涯学習支援・社会教育を推進する存在として（生涯学習・学習）ボランティアがさらに注目されるようになるが、これに関連して「新しい経験を得る」「学習する意欲を誘発される」「交際範囲が広がり、かつ深まるので、精神的安定を得るうえに、情報入手の機会が増え、良好な人間関係を結ぶ能力を身につける」という点で「学習ボランティア活動は学習活動という側面を持っている」「なすことによって学ぶ」というような、ボランティア活動がボランティア自身の自己形成につながるという側面にも注目したボランティア活動支援の必要性への言及も見られる[2]。さらに、1990年代に入ると、Lave,J.とWenger,E.の「正

統的周辺参加」（Legitimate Peripheral Participation）論に依拠して、社会教育施設ボランティアの学びを分析しようとする試みも見られている[3]など、ボランティア活動の地域社会や他者への福祉活動としての側面だけではなく、ボランティア自身の自己形成の過程としての側面も注目されてきている[4]。

一方、社会教育施設においてボランティアを受け入れる理由にはさまざまなものが考えられるが[5]、社会教育施設の存在意義を考慮すれば、施設の運営・事業に参画してもらうだけでなく、ボランティアの自己形成への支援という側面も重視しなければならない。しかし、ボランティアの自己形成への支援は特定の支援によって達成されるものではなくさまざまな内容の支援の総体によって達成されるものである点、ある一時点のボランティア活動が即自己形成に結びつくのか及びボランティア活動を通して得た知識・技術・考え方がいつどの場面で活用されるのかという点に留意する必要がある。そこで、ボランティア活動及びそれに関連する状況を長期的・継続的に把握し分析することをとおして、社会教育施設におけるボランティアの受け入れのあり方を考える必要がある。

(2) 研究の方法

社会教育施設におけるボランティア活動がボランティア自身の自己形成にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的として 1998 年に社会教育施設ボランティア研究会が実施したヒアリング調査（以下、1998 調査）[6]の結果をもとに、社会教育計画研究会では、主に、

1) ボランティア活動の継続状況の相違が、ボランティア自身の自己形成とどのように関連しているのか
2) 施設の規模や種別の相違が、ボランティア自身の自己形成とどのように関連しているのか

という視点から、1998 調査の対象者計 22 名のうち連絡先が明らかになった方を対象として、調査の依頼を兼ねた事前の状況確認を行い、最終的に 3 名に対して再度のヒアリング調査（以下、2007 調査）を実施した[7]。1998 調査は、その後の再度のヒアリング調査を前提としたものではなかったが、2007 調査では 1998 調査の枠組みや方法を調査組織の予算的・人的に可能な範囲で踏襲している。

1998 調査から 2007 調査までは 9 年が経過しているが、この 9 年の経過が持つ意味を一律にとらえることは困難である。しかし、3 名の方はいずれも 1998 調査の時点で未成年の子どもを持つ女性であり、9 年が経過すれば子どもの成長とともに家庭の状況が大きく変化していることは推測できる。そこで、ボランティア活動をとおしたボランティア自身の自己形成について分析するにあたっては、ボランティア活動と家庭の状況が相互に与える影響に注目する必要がある。

また、1998 年に社会教育施設ボランティア研究会が全国の社会教育施設を対象に実施したボランティアの受け入れ状況についての質問紙調査の継続調査として、社会教育計画研究会では 2006 年に同様の質問紙調査を実施しているが、2 つの調査の結果を比較した場合、図書館を除いて施設のボランティア活動に対する支援の質・量がともに低下してきていることが明らかにされている[8]。この調査結果は、あくまでも全国的な状況を総括したものであるが、2007 調査の分析にあたって考慮すべきものと考えられる。

なお、2007 調査では、ボランティア計 3 名のうち 2 名がそれぞれ現在も活動している施設の中でボランティアの受け入れを中心的に担っている職員各 1 名にもヒアリング調査を実施した。これは、ボランティア活動全体及びボランティア活動をとおしたボランティア自身の自己形成に当該施設の職員が果たす役割が 1998 調査の時点でその対象者からも言及されていたことをふまえ、それを職員の立場から明らかにすることが必要であると考えたことによるものである。

本稿では、以下、2007 調査の結果を、「ボランティア活動を通した中年期以降の主婦の自己形成」「ボランティアの自己形成における職員の役割」という 2 点から分析する。その際、3 名のボランティアはそれぞれ A さん、B さん、C さん、2 名の職員はそれぞれ D さん、E さんと表記する[9]。

2. ボランティア活動を通した中年期以降の主婦の自己形成

(1) 3 名のボランティア活動

本稿で取り上げる 3 名のボランティアは、1998 調査時に A さん 33 歳・B さん 50 歳・C さん 43 歳といずれもすでに成人期におり、2 回目にはさらに年齢を重ねている。ボランティア活動の内容は、3 名の活動する社会教育施設の違いもあり三者三様である。また、職業に関しても 2 回の調査の間に専業主婦の B さんに変化はないが、A さんはパートからフルタイム勤務へ、塾経営をしている C さんにもフリースクール運営が加わる等変化し、これも三者三様である。

(2) 図書館ボランティア：A さん

A さんは、1998 調査時にはパートタイム勤務の仕事をしながら、町立図書館において子どもへのお話会のボランティア活動を約 4 年間、月に 2 回程度行っていた。2007 調査時にはその 3 年前からフルタイムの仕事に就いたこともあり、ボランティア活動では基本的に不定期な裏方の手伝いに回る等変化があったが、一方で近隣の小学校で図書の指導の補助員として児童にお話会をしたり、地元幼稚園から子育てに関する講演会を依頼されること等の展開もあった。

2007 調査で、20 年ぶりに再会した友人にボランティアが無償の活動であることを「もったいない」と驚かれた経験を語る A さんは、「もったいないってびっくりされて、私の方がびっくりしたんですけど」と言う。「お金にならないからもったいないって思ってボランティアをしたことがなかったんで。ですけど、（中略）それにはかえられないほどの満足感とかやりがいとか、そういうもの十分もらってるんで」とボランティア活動で得られるものが、必ずしも収入と関連するものではないことを述べている。

また A さんは、同じお話会のボランティアの中には、子どもの年齢等による生活パターンの変化で完全に会から籍を抜いてしまう人がいる一方で、「子どもがいつか手離れたら、やっぱり時間ができたらまた戻って来たいって。何人かは籍があるんですよ。（中略）どう考えても両立は無理ですし、でも籍は置いてる。どうしてとも聞いてもないんですけど、でもその人も同じようにいつか帰って来たいという気持ちなんだなと思う」と A さん同様に、ボランティア活動との関わりを維持し続けようとする他のボランティアのことを理解

している様子がわかる。

(3) 美術館ボランティア：B さん

B さんは、市立美術館で常設展の案内や資料整理、小・中学生達を対象にした館内の案内等のボランティア活動（美術館教育）を 2007 調査時で、すでに 15 年継続している。また、美術館での活動とは別に同調査の 4～5 年前からは、図書館で子ども達に読み聞かせのボランティア活動も行っている。2007 調査で、B さんは 1998 調査のインタビューを「ちょうど 50 を過ぎた頃っていうのは平均的に、私自身もそうですけど、一番下が大学生でしたので子どもがちょうど具体的に本当にこう手がかからなくなった時期でもありましたので、本当に自分の、さぁこれからは自分の人生だって言うのをまさに実感して、それで動き出してって。動き出すっていうのもまた、すごくこう本当に意識してた」と振り返る。

活動内容に基本的に変化はないが、「研修から 10 年経ちましたから、それなりに 10 年経ったんだなって思いもありますし、やっぱり本当の意味での自信、自信っていったら語弊があるあるんですけれど、ある程度 10 年やってきた時間とか、そういうものに対してやっぱり自信もでてきている」と長年の継続が B さんを支えている様子が伺える。B さんの先輩ボランティアには、20 年 30 年活動を続けるベテランも複数人いるといい、その活動する姿を目の当たりにすることも B さんの励みになっているようにみえる。

一方で今後に関して、「60 ですので、そろそろやっぱりまわりに亡くなる方とか、もちろん自分自身のことも含めてですけど、そろそろこう大きな山を越えて、今度は下っていく時だとおもうんですね。ですから下り方をどういう風にしていくかっていうのが、自分の中でこの何年間かは大きいんですけど、その中でボランティアっていうのは、そうですね、大きな存在だったと確かに思います。あの、それがごくごく自分の日常になるくらいに、大きなものだったと思います。」と述べている。この発言に、B さんが年齢を意識し周囲との協調を図るのは、女性の他者との関係性を重視する相互依存性が強く働くことからくる自己認識の表れとみることもできるが、ボランティア活動が B さんの日常そのものになったがゆえに、いつまでも「意識をして」特別な位置に置くべきものではなくなっているともいえるであろう。ボランティア活動が欠かせないものとして B さんに根付いているからこそ、状況の変化が予測される今後の日常の中のどこに体系付けるのかを探っていると思われる。

(4) 公民館ボランティア：C さん

C さんは 1998 調査時には、15 年間小学校の教員を務めた後退職し、小・中学生を対象とした学習塾の経営と地元の町立公民館内の図書室でボランティア活動を約 5 年間継続していた。1999 年に町立図書館が完成したこともあり、2007 調査時には公民館図書室のボランティアグループは解散しており、C さんは「不登校の子を受け入れ救わな、と、おこがましいけどそう思ったんですね、この子たちの居場所づくりを」という思いから、不登校の子どもを受け入れる活動を開始している。

C さんにとってボランティア活動とは、「仕事があって、ボランティアがあって、子育てがあって、そういうなかでひとつの役割」という。C さんは、活動に際しずっと意識してきたという、地域に受け継がれている哲学のような家訓のようなものの中から、「三方よ

し」というものについて述べている。「それは「買い手よし、売り手よし、世間よし」、その3つです。買い手と売り手がよくてもあかんのや、この3つがよくてはじめて人間的にも経済的にも成功できるんだよっていうことを、(中略) 教えてもらったことなんですね。私、いつも三方よしかなって、仕事しているときとかいつもそれを思ってて。私はボランティアしてるけど、仕事おろそかにしてたらあかんし、家庭もおろそかにしたらあかんし、まぁ色んな三方よしですね。そういうことをいつも考えてやってきた」という。

(5) ボランティア活動継続の意味と自己形成

日本における主婦は、就業や社会参加に関して家族のライフサイクルに大きく影響を受ける。子どもの年齢・夫の転勤等で、主婦が就業や活動を変更・中断する例は多々見受けられることであるが、これは上記の3名すべてが言及していることである。小谷良子は、「その結果、家庭外活動のほとんどは専業的主婦にとって非本質的な活動であるという意識を持つようになり、その活動が主婦としての役割を阻害するか否かに社会参加が左右される」[10]とする。Aさんが、ボランティア活動に収入とは別の価値を認識しながら、主婦役割の比重が重い現在は就業形態の変化から、距離を置かざるを得ない状況に合致しているといえるだろう。

また、主婦が家庭外役割において多大な心理的幸福感を得ているという西田裕紀子の研究[11]において、妻・母親・就労者・活動者といった各役割を獲得した女性も、その役割だけでは満足感・達成感を得ることはできず、社会参加する家庭外役割が幸福感に重要な意味をもつことが示されている。Cさんのボランティア・仕事・家庭の「三方よし」を意識した活動スタイルは、まさにこの好例であろう。

レビンソンは、家庭とは多くの場合、「若い親が未成年の子供を育て、社会に自分たちの場所を確立しようと努力するときの拠りどころとなる社会制度である」[12]という。従って家庭のもつ機能は子どもの巣立ちや親自身の中年期への移行等によって大きく変質し、家庭内での各自の役割も変質していく。自身の年齢を強く意識してボランティア活動を続けるBさんも、やはり子どもの年齢等家庭内の役割の変化にともなってボランティア活動も大きく変化している。

一般に「自己形成」という概念は青年期と強く結びついているといえるだろう。しかし、発達課題という概念を初めて提唱したハヴィガーストや、生涯を8つの段階に分類し、その各期に特有の克服すべき課題と危機があるとしたエリクソンは、成人期が必ずしも自己形成・人格形成のゴールであるとはとらえていない。エリクソンは成人期という概念について、「それまでは単にあらゆる発達の完成した到達点と見なされていたのが、成人期もまた（他の段階と同様に）種々の葛藤に満ちたひとつの独自の発達段階と見なされるに至ったのである」[13]といい、人は青年期を経過したのちも発達し続けるものであることを述べている[14]。つまり、青年期にいったん獲得した「自己」は、中年期や老年期においても、社会的位置付けの変化や肉体的若さの喪失等によって未経験の危機を迎え、再吟味と克服の必要が生まれるのである。

3名の主婦それぞれが長期にわたるボランティア活動を語るなかで、異口同音に述べるのは、ボランティア活動によって自らが成長できたという実感であり、充実感を得たという経験であった。

3 名は、ボランティア活動を通じた成人期における自己形成を基盤として、主婦であることに加えた「個」としての社会的役割を創り出してきた。そしてそれぞれが、社会教育施設での長期にわたるボランティア活動で「満足感」や「生きがい」となるものを得てきた。家族のライフサイクルに合わせてその活動に変化を余儀なくされることもあるが、3 名の選択は単なる受身ではない。可能な選択肢の中から活動を優先させてきたし、それは今後も継続されるはずである。

社会教育の領域においては周知のとおり、施設・活動内容・個々の取り組み方等、社会教育施設におけるボランティア活動といっても、実に多様な実態について、単純な図式化が目的ではないが、ボランティア活動の存在が、青年期とは異なる「自己形成」の大きな柱となったとみることは十分できようし、相互依存的とされる日本の主婦というあり方が、逆に家族や周囲との調和を保ちながら、フレキシブルな活動を可能にしてきたということもできよう。

さらには、高齢社会において地域活動の担い手として主婦が期待される一方で、専業主婦の減少など主婦役割の位置づけに変化がみられる今日、今後はより体系的な主婦役割及び青年期を越えた成人の自己形成に関する研究がなされてしかるべきだろう。

3. ボランティアの自己形成における職員の役割

(1) 2 名の職員

2007 調査では、A さんが活動している施設（図書館）の職員である D さん、B さんが活動している施設（美術館）の職員である E さんの 2 名にもヒアリング調査を実施した。D さんは、調査時で嘱託職員として 13 年勤務しており、施設でのお話会ボランティアの立ち上げ以来中心的な役割を担ってきた。すでに 1998 調査時に A さんから D さんの存在の大きさを示唆する発言がなされていた。一方、E さんは、中学校の教員から当該施設に勤務して調査時で 2 年目であったが、その勤務開始時からボランティア担当としてボランティアの受け入れに中心的な役割を担っていた。

2 名の職員は、勤務先の館種や勤務年数に違いがあるが、加えて、施設におけるボランティアの受け入れ体制の違いも指摘しておく必要がある。D さんが勤務している施設は、もともと町立図書館（現在は市立図書館）として運営されてきており、2007 調査時の職員数は 5 名と、組織的にボランティアの受け入れ体制を整えて受け入れているという形ではない。一方、E さんが勤務している施設は政令市立の施設であり、2007 調査時の職員数は 20 名を超えている。さらに、ボランティアの受け入れを 1970 年代に開始し、当時から 3 年間の養成講座を設けていたなど、社会教育施設におけるボランティアの受け入れの先駆けとして取り上げられることも多い。

(2) 図書館職員：D さん

D さんは、図書館が開館する前は町立児童館の嘱託職員として勤務しており、図書館が開館する際に児童館と複合されることになり、すでに司書資格を持っていたことから嘱託の司書として勤務することになった。D さんは、自分が正規の職員として採用されていたら 3 年くらいで他の部署に行っていただろうから、嘱託職員であったからこそ現在まで活

動を続けることができたと述べている。

Dさんは、学生時代から子どもたちへのお話会に強い関心を持っており、児童館での勤務をとおしてその欲求はさらに高まっていった。そして、図書館の開館と同時にボランティアを募集してお話会の活動を始めることになるが、「最初は単純に土日の人手が足りないので誰か手伝ってくれないかなあっていうぐらいの発想しかなかった」ものの、「集まってきてくださった方が、やっぱりお話の好きな人っていうのはなんかこう同じような雰囲気の人が多いのか、みなさん独特な魅力、良い魅力を持った方ばっかりで。それでやってるうちに、あ、なんかこっちが刺激されて、それでお互いが協力しながら進めていった」という。そこで、自分には「何とかこの力をお話会に持続していく、持っていかないといけないなあっていう、自分自身にすごくこう責任感みたいなのを感じてきた」とともに、ボランティアの活動の様子を次のように分析している。

彼女たちは彼女たちで自分が好きなことに飛び込んできたもんやから、ほんと前向きに、最初は簡単にやってみようかみたいな感じだったと思うんですけど、でもやってるうちにほんとにやりがいを感じてくれて、それが楽しくなって、自分の生きがいになって、何かいいように事が運んでいったって感じですね。

上記の発言中に「彼女たち」とあるように、このお話会ボランティアは女性、特に小さい子どもを持つ女性が多い。Aさんもそうであるように、自分の子どもがお話会に参加している（いた）など、一連の子育てとお話会の活動が少なからずオーバーラップしている。そうした状況をふまえ、Dさんは、10年を超えるボランティアの受け入れの経験から、ボランティア活動とその支援のあり方について次のように述べている。

根本的には変わってないですけど、ボランティアの人たちを見ててね、やっぱりこう一生懸命できるときと、やっぱりこう子どもさんの成長とともに離れていくこととかありますよね。そういうの見てて、こういう活動はやっぱり長いスタンスで続けていくということが大事だなあっていうのを最近つくづく感じています。だから、こういう施設がね、ふつうボランティア活動を受け入れる意義みたいなんか、そういうのはやっぱりこう長く続けられる、長く提供できる、そういうものがものすごく大事だなあって思うんで。施設が受け入れを長く続けていたら、いったん途切れてやめていった人もまた帰って来れる、ある時期ね。やっぱり、好きでやってる人たちだから、あの今はちょっとできないけど、ちょっとできる時期がきたらまたやるわぁみたいな感じで、また帰って来れる。そういう、こう何か場所というかね、それをこう継続していくのがすごく施設の価値かなあっては思うんですけどね。

Dさんは、退職後にこの図書館でお話会のボランティアとして活動することも考えているという趣旨の発言もしており、本人のお話会に対する思い入れの強さがボランティアの受け入れの開始・継続の原動力となっていることは事実である。しかし、それだけでなく、実際にボランティアを受け入れる過程で、ボランティア活動からボランティア自身の「生きがい」が見いだされること、さらにボランティア自身のライフコースとボランティア活

動との間に明確な接点が見いだされることから、施設がボランティアを受け入れることの意義を実感しているのである。

(3) 美術館職員：E さん

E さんは、美術館において、ボランティアの受け入れに関わる施設側のコーディネーターとしての役割を担っている。具体的には、ボランティア同士のコーディネートはボランティア自身が担っている部分も多いため、ボランティアと施設の職員及び施設の職員同士のコーディネートを担う形になっている。勤務開始時のボランティアとの顔合わせの際、事前に「知らない方にね、大変だよってみたいな感じで言われてた」こともあり「最初は怖かった」という感想を抱いたが、「でも、すぐに慣れました。もう、1ヶ月ぐらいで慣れちゃって」「世話好きって言ったら失礼ですけどね、でもほんと母親のような感じだったので、全然最初のイメージと違っていました。仲良くなって話していくうちに、色々なことがわかってきました」というように、ボランティアに対するイメージ・考え方がはっきりと変化した。

ボランティアの人数が 70～80 人ということもあり、ボランティアの属性は多様であるが、E さんは「色々いらっしゃるんですけれども、やっぱりボランティアさんは、生きがいなんですよ」という見方を持っており、さらに次のように述べている。

他館の掛け持ちをしてるボランティアさんで、ボランティア活動そのものが好きだけど美術館に対する愛着とかではなくて、だから他館との掛け持ちを 3 つぐらいしている人ですね。当館のボランティアさんの多くが当館（※館名が登場するため、ここでは「当館」と表記している）のボランティアだというのが、何か自負、そういうのがあってですね。で、それが生きがいみたいな感じなんですよ。

ボランティアが「生きがい」を感じて活動していること自体には「あ、やっぱりって思います」というように意外性を感じてはいない E さんであるが、加えてボランティアが「義務感」を持って活動していることについては、「やっぱりというのもあるけど意外な面もあります」と述べている。E さんは、この「義務感」は「自分の中の義務感みたいな。絶対これやり上げないといけないみたいな」というように、ボランティアの外側からの強制力によって生じているものではなくて内側から生じている、ボランティア活動の自主性・自発性を源にするものだと考えているようである。

(4) 職員によるボランティア活動支援の方向

D さんは、他の施設の状況について「ボランティアっていったらね、どこもやっぱり安上がりのね、そういうこと、労働力にしか考えてないんですよ」「ほんとにボランティアさんの力を、ボランティアさんが活き活きと活動しながら一緒に図書館の仕事をしましょうっていう、そういうスタンスじゃない、全然」と述べ、E さんは「なかには個々のボランティアさんが、ガイダンスとか資料整理じゃなくて、例えば切符きりとか、そんなんをしていいんじゃないかとか思われてる職員の方も、それはいると思います」と述べているように、ボランティアの受け入れに関しては、施設がボランティアを支援するという視点を

施設全体が持っていない場合もあれば、職員間でその視点の持ち様に差がある場合も見られる。そのような状況において、ボランティアを施設を利用する「学習者」と位置付けてその自己形成を支援することが積極的に行われる段階にたどり着くことは容易ではない。それは、D さんの場合に象徴されるように、職員個人の経験に裏打ちされるパーソナリティの有無に左右される側面が大きいことも否定できない。

そこで、ボランティアを施設を利用する「学習者」と位置付けて支援するための方策を進めるにあたって、第一に必要とされることは、個々の場面でのボランティアとの接し方のノウハウではなく、ボランティア活動をとおしたボランティア自身の自己形成が社会教育に限らないその他の機会をとおした自己形成とどのように異なるのかについての認識である。E さんは、ボランティア自身にとっては「生きがい」だけでなく「自分の中の義務感」の存在が大きいことを指摘しているが、これについては、ボランティア活動が「自分の中の義務感」いいかえれば「自発性」と表裏一体の義務感を本質的に持っていると考えられることから、それをそのままボランティア活動をとおしたボランティア自身の自己形成の特徴ともみなすことができるであろう。

次に、D さんは、ボランティア活動の「やりがい」がボランティア自身の「生きがい」へと転化していくことを指摘しているが、この転化の過程がボランティア自身の自己形成の過程において重要な位置を占めていると考えられる。そこで、この過程を支援していくことがボランティア活動への支援として職員に求められる役割であるとみなすことも可能であるが、実際にはやりがいが生み出される過程を支援することは可能だとしてもそれを生きがいへと転化させる過程を支援することは容易ではない。生きがいの有無はボランティア自身にとって当該ボランティア活動が充実しているかという範囲にとどまるものではなく、生きがいの有無を本人以外が判断することも容易ではないので、あくまでもボランティア活動の「やりがい」に関連する職員の役割を明らかにすることが現時点でより有用な作業として位置付けられるであろう。

4. 今後の研究の方向

社会教育研究においてボランティア活動が取り上げられることは珍しくないが、ボランティア活動を経時的に分析している研究は少ない。また、ボランティア活動を長期間行っている方だけでなく、ボランティア活動自体は短期間であってもその活動がその後長期間にわたって意味を持っていると考えられる場合、あるいはボランティア活動を断続的に行っている場合も研究の対象とする必要がある。今後は本稿で取り上げたヒアリング調査を継続していくとともに、例えば定量的分析が可能となるようなデータの収集方法も検討するなど、多面的な分析を目指していきたい。

※　なお、本稿は、松橋・大木・本庄の 3 名で全体の構成などを検討し、1.、3. 及び 4. は松橋、2. は本庄が執筆した。

注記・引用文献

1) 伊藤俊夫「社会教育におけるボランティア論」辻功・岸本幸次郎編『社会教育の方法』（社会教育講座第5巻）第一法規、1979、pp.52-53.

2) 稲生「現代社会とボランティアの意義」稲生他編『学習ボランティア活動』（生涯学習テキスト⑤）実務教育出版、1987、pp.14-19.

3) 小川誠子「社会教育施設ボランティアの学びに関する序論的考察—「正統的周辺参加」概念を通して—」『生涯学習研究の課題を問う』（日本生涯教育学会年報第20号）1999、pp.141-156.

4) ここまで取り上げた論などが、生涯学習支援・社会教育の領域においてボランティア活動を把握するさまざまな視点の中でどのように位置付けられるのかについては、鈴木眞理『ボランティア活動と集団—生涯学習・社会教育論的探求—』学文社、2004、pp.16-21を参照。

5) 例えば、社会教育施設ボランティア研究会『社会教育施設におけるボランティア活動の現状～調査報告 1998～』1998、社会教育計画研究会『社会教育施設におけるボランティア活動の現状—調査報告2006—』2008を参照のこと。

6) このヒアリング調査の記録は、社会教育施設ボランティア研究会『社会教育施設ボランティアの自己形成Ⅱ—面接による22名の事例研究—』1999にまとめられている。

7) このヒアリング調査の記録は、社会教育計画研究会『社会教育施設ボランティアの自己形成に関する経時的研究Ⅰ』2008にまとめられている。

8) 社会教育施設ボランティア研究会『社会教育施設におけるボランティア活動の現状～調査報告1998～』*op.cit.*、社会教育計画研究会『社会教育施設におけるボランティア活動の現状—調査報告2006—』*op.cit.*を参照。

9) なお、以下で取り上げるヒアリング調査における調査対象者の発言は全て、社会教育計画研究会『社会教育施設ボランティアの自己形成に関する経時的研究Ⅰ』*op.cit.*に掲載されているが、そのページは省略する。

10) 小谷良子『＜専業的主婦＞の主体形成—個人・家庭・地域生活者としての主体形成の課題—』ナカニシヤ出版、2007、p.53.

11) 例えば、西田裕紀子「成人女性の多様なライフスタイルと心理的well-being に関する研究」『教育心理研究』第48巻、2000.

12) D.レビンソン著／南博訳『ライフサイクルの心理学』（下）講談社、1992、p.266.

13) E.H.エリクソン・J.M.エリクソン著／村瀬孝雄・近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結＜増補版＞』みすず書房、2001、p.4.

14) ハヴィガーストらの示したこれらの概念は、20世紀中頃の米国における主に白人男性の平均的なライフサイクルを基にしたものであり、機械的なあてはめがどのケースにおいても有効であるといえないことは注意を要する点である。しかし、人には生涯にわたり発達していく可能性があることを指摘したことは、間違いがないだろう。そしてこれは、成人期を過ぎた老齢者もさらに新たな発達段階をすすむことを示しているといえる。